



2022年2月24日、ロシアはウクライナへの本格的な軍事侵攻を開始し、今時点においても戦闘は継続しています。兵士はもとより民間人にも多くの犠牲者が出ており、言葉を失うばかりです。「セナードつうしん」第5号は、このウクライナ問題の特集号としました。

また、仙台・羅須地人協会は、この戦争に対して以下の抗議の声明を發します。そして、人道危機に瀕しているウクライナの人々への支援を行います。みなさまからお預かりした募金は、武器に使われることなどないように、確実に人道支援のために活動している団体に届くようにいたします。また、協会としても別途緊急に寄附させて頂きます。

#### ロシア軍によるウクライナ侵略に対する抗議声明

2022年4月16日

仙台・羅須地人協会

2022年2月24日12時25分(日本時間)、ロシアのプーチン大統領がウクライナに対する「特別軍事作戦」の開始を宣言しました。それは「作戦」に名を借りた武力侵略そのものであり、攻撃の標的が学校や病院や商業施設さらに原子力発電所などにも及んでいることから明らかなように、人の道を外れた言葉に表せない悪行そのものにほかなりません。

わたしたちはロシア軍によるウクライナにおける戦闘行為の即時停止と即時撤退を声を大にして訴えます。また、ウクライナ軍による応戦(体制)停止と、ロシアとウクライナが実効性のある停戦に向けて交渉に入ることを強く求めます。同時に、わたしたちは、今回の「戦争」についての「真実」を知る意志をもっていることを表明します。

宮澤賢治の精神を源流にもつ「仙台・羅須地人協会」は、2011年の大震災による受難を原点として出発しました。漆黒の闇の中すさまじい余震と寒さに震え、沿岸部では大津波の猛襲を受け、あまつさえ原発災害にも直面しました。あのような残酷・惨禍の次元だけでなく、昼夜を問わず砲弾が降り注ぐ状況。ウクライナ市民が直面している地獄はわたしたちの想像をはるかに超えます。わたしたちは「戦争は絶対許さない」と心の底から叫びます。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」(宮澤賢治)をあらためて心に刻みます。

## 殺戮戦一刻も早く終焉を！

林 郁

子ども・障害者・病人～弱者の犠牲～渴して息絶えた子ども、手を縛られた民間人の死体～戦死体を地に埋める労働の辛さ！

ロシア兵のレイプに「満洲」でのソ連兵の日本女性強姦が重なる。日ソ中立条約を一方的に破って 8 月 9 日に満洲に侵攻したソ連＝プーチン露軍非情侵攻戦！

露政権は戦死者数を隠蔽し、友軍兵士の戦死映像を自国民に大きく示して民族団結と反撃を鼓舞している。反戦デモや反戦紙誌は弾圧され、大統領支持は 82% に上昇。

大東亜戦争日本大本営嘘情報に似ている。飢餓の敗戦、小学 3 年だった私は忘れない。防空壕で聴いたラジオの日本大勝利の放送は大嘘だった事。

今回ロシアは日本に対し北方領土返還を拒否し、根室沖大規模演習を開始、夜間奇怪赤光発射。根室住民は眠れないという。北方 4 島は日本領である＜正式証書＞を日本は 19 年ぶりに国際提示した。安倍元首相がプーチンに捧げた大金はどうなったの？

私は札幌在住だった 1960 年代後半、小型車に幼い 2 児を乗せ北海道辺境を巡り、根室では漁民の苦勞を聴いた。「ソ連監視船は日本領海漁船も拿捕し最新機器を奪う」。

1981 年 9 月、ポーランドでソ連属国時代の苦難も聴いた。スターリン 1953 年死去、フルシチョフの雪解け開放、トップ交代で暮しが変わる体験も聴いた。プーチンは意地狂いせず戦火を終結し身を退くべし。

ロシア兵の戦死も悼む。激戦前線に出され

るのは辺境少数民族、バイカル湖ブリヤート人など。その死は 20% の高率という。

1987 年夏、私はバイカル湖「環境と文学国際会議」に参加し、ブリヤート人に会った。会議主宰のワレンチン・ラスプーチンはブリヤート人＋ロシア人のダブル。叡智の作家で国會議員。日本側野間宏ほか 6 人と多民族ソ連側 7 人は、バイカル湖上を巡る船上で真摯に討論。全員反原発だった。

私は「満洲」崩壊時のソ連の蛮行を『アムール史想行』に書きソ連嫌いだったのだが。支え合う多民族ソ連国籍知識人に感動した。日本人そっくりのブリヤート人は「祖先は日本から来たのでは」と恵比寿大黒の彫像を示した。あの優しい人たちの孫世代がウクライナ戦に出されているのだ。

87 年からの日ソ国際会議は中央アジアのバルハシ塩湖～アルメニアのセヴァン湖～琵琶湖と 4 年余続いた。京大水問題の石田紀郎先生はアラル海（取り水等で 3 分の 1 以下になった）の救出を今も続けている。破壊された戦場の回復労苦が目には浮かぶ。ウクライナ穀倉地に毒兵器を埋めるな！一刻も早く殺戮戦終焉を！

## 二〇二二年に ウクライナの惨状を鑑みて

若生 和子

雪が降ると、「あめゆじゅとてちてけんじゃ」（永訣の朝）という宮沢賢治の妹トシさんを想う言葉が思い出されます。特に仲の良かった兄と妹。

第 24 回冬季五輪北京大会は無事に終わった。仲よし兄弟・姉妹の、スキージャンプ・スケート競技等には特に声を大にして応援をした。宮沢賢治の童話「雪わたり」のお話

も、さりげなく相手を思いやる心や、兄妹の愛が語られているように思います。

そして、パラリンピック、平和の祭典を主催国中国の習さんはニコニコと笑顔を振りまいていた。一方では同じ地球で平和に暮らしていたウクライナにロシア軍が侵攻した。一転して平和が崩れた。解説者の方々は他人事ではない、日本もいつウクライナのようになるかわからないと言っている。ロシアで生活している人々も「戦争はやめて」と訴えている人々がいる。戦争は絶対反対である。宮沢賢治の「ほんとうの幸いを生きる」の心をロシアの大統領のプーチンさんに、篤と読み聞かせたいものである。

「自分だけが幸いではだめだ。皆が幸いになってこそ本当の幸いになる。」と、どうか早く早くプーチンさんの心が宮沢賢治さんのような、心根に近づきますようにと祈るばかりです。

雪が溶ければ、我が家の小さい庭にも「春はもうすぐ」と、チューリップの芽が出ています。クロッカスの花が白・黄色・紫色とかわいらしい花が咲いて語りかけてくるようです。自然とは何と素敵でいいものなのでしょう。

令和の中高生が好きな人に渡すのは「花束サプライズ」花束だそうです。

別れと出会いの季節を包み込むように、春はやって来ます。

ウクライナにも平和な春が、そして、コロナ禍も早く収まりマスク無しの生活が、人と人との距離が縮まり、お互いの喜びや痛みが話し合える日が早く来ますように、神佛に祈るばかりです。

\* \* \*

冷血指導者ロシアのプーチン大統領に日本の東北に住むばあちゃんが言いたい。

宮澤賢治の「雨ニモマケズ」の詩の最後の8行です。

ツマラナイカラヤメロイヒ  
ヒデリノトキハナミダヲナガシ  
サムサノナツハオロオロアルキ  
ミンナニデクノボートヨバレ  
ホメラレモセズ  
クニモサレズ  
サウイフモノニ  
ワタシハナリタイ

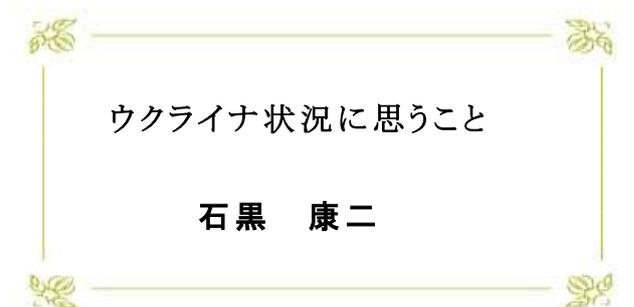
同じ生きてる人間同士です。

プーチンさんに心底から伝えたい。このような人間が世界にいたということ。プーチンさんのウクライナへの侵攻がどれ程のものなのか、思い知って欲しい。

日本に自生するエビネ「新緑の瞬間(とき)」が「世界らん展 2022 ー花と緑の祭典」で最高賞の日本大賞に選ばれたそうです。

日本のラン(蘭)が大賞を取るのは初めてだそうです。うれしい喜ばしいニュースです。

世界中が平和な春が一日も早く来ますように。



ウクライナから眼を離せない状況が続いています。特にマリウポリでは住民が避難していた劇場や病院まで攻撃され、現地の「市民5,000人が犠牲になった」との報道も伝えられています。一日も早く、この人殺し行為をやめさせねばなりません。

ロシアの軍事行動を国連憲章違反とし、ロシア軍の即時・完全・無条件撤退要求は141カ国の賛成で(3/2)、この完全履行と敵対行為

の即時停止、民間人保護など人道危機打開は 140 カ国の賛成で(3/24)、それぞれ国連総会で圧倒的多数で承認されています。この国際社会の、人道に基づく総意にロシアは従うべきです。

旧ソ連圏崩壊以降大国ロシアが包囲されており、ウクライナの NATO 加盟は何としても阻止する、との思いがプーチン大統領にはあったといわれています。しかし、軍事大国の力尽くでの他国への領土侵略や主権国家つぶしが許されるものではありません。一日も早く、戦争を終わらせ、1,000 万人にも及ぶ避難民が元の地に戻れるようにすべきです。

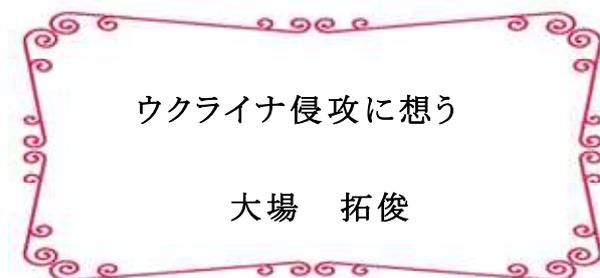
確かに第 2 次世界大戦の戦勝国 5 カ国が常任理事国となり拒否権を持つ国際連合は、何も決められないし、無力かもしれません。しかし、意思を示し、方向を定めることはできます。そこで、世界の持続的な開発目標 SDGs が共有され、核兵器禁止条約が採択・発効となっています。

現実に国家がある以上、政治・経済・社会のルールや仕組み作りは国家間の連携や協力などの形を取りますが、その中にいるのはそれぞれの人々です。それぞれの一人ひとりの人々が事実に基づく必要な情報をしっかりと入手できること、そして何が起きていて、どうすべきかを判断できることが重要です。

いまのロシアの情報統制は、おそらく戦前の日本の治安維持法下に近いのでしょう。その下であって、多くの勇気ある行動が伝えられています。報道の自由、言論の自由の大事さを改めて認識しています。

多くのことを考えさせられるウクライナ問題ですが、問われているのは人間の知恵であり、人類の未来です。悲惨な戦争体験をもとに制定された日本国憲法の前文や第 9 条、広島・長崎の被爆体験。この精神や経験を、いま一度大きく世界に広げる機会に、ウクライ

ナの人々等々と繋がって、していきたいものです。



ある政党の党大会でウクライナ侵略を強く非難する決議を拝見する。ロシア政府の行動は強く非難される事であるが、経済制裁や G7 と一致した措置を支持するとあるが、これについては違和感がある。

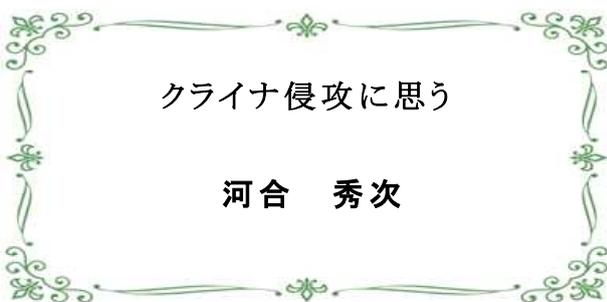
日本政府が取るべき行動は欧米と一緒に行動する事ではない。基本的には欧州の問題は欧州で解決すべき事である。遠く約 9,000km 離れた極東の日本政府がやる事は人道支援もあるが「しがらみ」のない日本政府が停戦のために両国の交渉促進のための環境づくりや首脳交渉や交渉仲介である。この事は、先の大戦を踏まえた日本国憲法に明載されている。9 条は「正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」とある。この平和憲法で平和外交を進めるべきだ。日本政府の独自外交が問われている。

経済制裁をやればロシア政府は経済戦争と見て「北方領土」交渉に伴う北方交流が中止となり数十年に渡る交渉は 0(ゼロ)に元る。ロシアは多くの資源大国(石油、ガス、森林、農水産物)、資源が入りずらくなり、値段が高騰するであろう。それにより多くの品物に影響を受け日本国民も多くの負担を負ってしまう。

21 世紀に入り 20 世紀型の戦争が発生するとは震撼する事であります。戦争により両国

の兵士や市民に数千名から数万人の犠牲を起している信じられない気持ちだ。政府(国)のために市民が犠牲になって良いものなのか?! 先の大戦においても日本国内外でも多くの犠牲を生み、そのため情報統制や徴兵されたと気付く。今回の戦争報道でも見えない形で政府の影響下で情報統制が日本も含めて各国である。

私達一般市民が戦争の前で何が出来るのか? 避難民への民間団体を通じた支援や膨れ上がる難民は欧州で限界であれば日本でも引受けざるを得ない。今ほど私達の平和力が問われている。



## クライナ侵攻に思う

河合 秀次

先月(2/24)以来のロシアのウクライナ侵攻を連日見るにつけ心が痛み、事務局からのメールに何かお応え出来る様な文章を! と思い立ってみた。

今回の戦争は元はと言えば兄弟喧嘩、でも喧嘩両成敗にはなるまい。

2008年グルジア侵攻時、2014年一方的なクリミア併合時、プーチンの言い方はいつも決まった常套句で、「住民保護の為」の表現である。今回の場合、(ロシア系住民の多い)ウクライナ共和国東部のルガンスク、ドネツク両地域の独立を一方的に承認して自軍を誘導し「ロシア系住民保護」が大義名分だ。

多くのロシア系住民は戦争までして保護されたいと考えているだろうか?

きょうもまたウクライナを破壊し続ける。連日多くの人々が犠牲になり、世界中から非難され、更には自国内からも反戦機運が従来に

なく高まってきて、側近達も次第に離れていくが、まだ一向に聞く耳を持たず、爆撃は続く。

この数日は、劇場、学校、ショッピングセンター等々、人々が避難している場所を狙っては爆撃の連鎖だ。正に許しがたい暴挙である。「子供達」とロシア語で書かれた場所をも敢えて狙っている様だ。(書かぬ方がマシだったかも?)

ロシア側が「虐殺があった」とか「武器弾薬庫だった」と正当化する場所も専門家達によれば実際とは違っている、単なる侵略作戦の正当化に過ぎぬ。

長期政権で大統領への諫めや進言が全く作動していない。軍事力だけで強引に現状変更を推進する国の現実をみる思いだ。やはり、民主主義国家とは、国民が政権や為政者を選べる体制が不可欠であり、今のロシアは主権在民とは真逆だ。

実は僕自身、(川内)教養部時代ドイツ語と共に心血注いで(身に付けた)ロシア語はその後も時折仕事でも活かし、自身の見えない資産( Invisible Asset )として、今でも単語集や例文集を読み返すロシア(語)ファンを自認する。就職後も幸い良師にも恵まれ、朝日のロシア語弁論大会には3度出場し2度入賞した。

昭和47年(マスター1年の冬)、ロシアを1人で旅行した。横浜→ナホトカ→ウラジオストク→モスクワ→レニングラード(当時)→キエフ(の丘が特に有名)→オデッサ→イルクーツク等々。特にキエフやオデッサの街並みが忘れられぬ。何と新婚旅行まで当時のソ連だった。モスクワ/レニングラード/キエフと回った。

ロシアの美術館/音楽・民謡/ロシア料理(キエフ風カツレツ/フォークを指すと、中から熱いバターがピュッと出てくるカツ)等々枚挙に暇がない。思い入れが強いだけに、今回の件

は残念でならない。

更に怖いのは、今回のロシアを見習って中国が台湾虐めを始めるのでは？と危惧する。私自身、台湾新幹線プロジェクトで 2 回滞在し、合計 3 年半を過ごした台湾は第 3 の故郷だ。(第 2 は仙台)

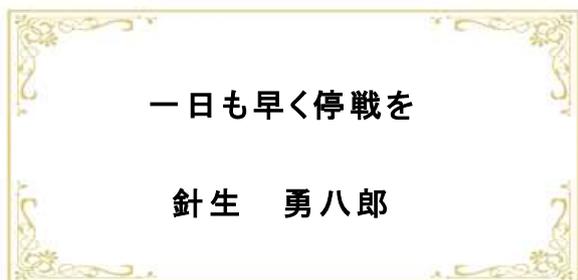
昨日( 3/21 )は、日本に対し突然「北方領土の交渉も打ち切る」と言ってきた。

全く論外である。終戦 1 週間前( 1945 年 8 月 8 日)日ソ中立(不可侵)条約を一方的に破棄して 4 島を分捕ったのはどこの国の誰だ？

経済的制裁は今の段階では止むを得ないが、経済制裁の返り血(ブーメラン)で、物価高はじめ、日本人や日本の生活や産業が苦しむの見るのは(私ならずとも)辛い事。

この数日、停戦の準備もいづらか進んでいる様だが、ゼレンスキー自身から「自分も辞めるからプーチンさん、貴方も辞めろ！」とってくれる事は絶対に無理だろうか？内心期待するのだが～。

この 2、3 日、中露間が急接近中だ。中国にしてみれば、ロシアは北朝鮮同様、配下にして、生かさぬ様に殺さぬ様に、対米／対日／対韓／対自由主義諸国の点でロシアの大国を泳がせる～、そんなシナリオが私の頭をよぎって仕方ない。



私は若い頃から労組活動に従事していたので旧ソ連時代でしたが、ロシアの各都市や仙台市の姉妹都市であるベラルーシのミンスクを訪問し交流してきました。

その時に会ったのは労働組合の関係者が主でしたが、皆社会主義国家建設に燃えており、自ら戦争を起こすことは考えられませんでした。いまでも多くのロシア人は戦争に反対だろうと信じていますので、今回のウクライナに対する武力攻撃は何とも残念でならない。

今回の事態に対し、日本を含む多くの国が経済制裁の強化でロシアに停戦させようとしたことはやむを得ないことと思うが、戦闘が 1 ヶ月以上も続き非戦闘員である子供や高齢者・女性等に多くの犠牲者が出ている現状を考えた時、これ以上の犠牲者を出させないために制裁一辺倒でなく停戦のための話し合う機会を早急に作るべきだと思う。

特に日本は北方領土や食糧やエネルギー等の問題で関係を深めて行かなければならない状態だと思うので、今回の一方的な武力攻撃に対する非難や制裁を行うのはやむを得ないとしても停戦交渉に入る余地を残しその労をとるべきだと思う。

そんなことは甘い、生ぬるいと言われるかと思うが、今から 80 年前の日本は「鬼畜米英」と言ってアメリカ人やイギリス人を銃剣や竹やりで刺し殺す訓練をしていたのです。

しかし、戦いが終わってみれば我々は何と愚かなことをしたのだろうと言わざるを得ないしその後は誰よりも深い友好関係が出来たのである。

今回の事はよくよく話し合えば解決出来ない事はないと思うのである。

ロシアでも多くの人々は戦争よりも平和を願っているはずである。

今は一日でも早く停戦を実現し、これ以上の犠牲者の発生を食い止めるとともに、懸案事項は話し合いで解決するという道が作られることが現状における一番の課題だと思う。

最後に、今回の問題に関連させて日本も

憲法を改正して軍備を強化し、敵基地攻撃能力や核武装などを考えるべきだとの動きが活発化し、世論もその方向に流れている様子は80年前に逆戻りしているようで大変心配である。

日本の改憲、軍備増強は近隣諸国の軍拡競争を惹起し緊張関係を深めるだけである。

現行憲法を守り「専守防衛」「非核三原則」を守ることが日本の平和を守る道だと信じています。

### プーチンの戦争と 国際社会の対応

山崎 恭平

コロナ禍の収束に見通しがつかない上に私自身も目下人生初の闘病中の緊張感が加わり、最近のプーチン大統領が仕掛けたウクライナ戦争に連日心を痛めている。人類のこれまでの様々な反省を踏まえ成り立っている現代社会で、なぜこんな非合理の謀略が行われているのか、ロシア国民はどうしてこれを許し反対しないのか、そして国際社会がどのようにして有効な対応を図れるのかに注目している。

国連のロシア非難決議審議の過程で、ロシアに中国が配慮しインドも組するかのようなRICの動きが伝えられた。しかし、インドは、ロシアと中国と違い独立以来民主主義を守り、最近では日本、米国、豪州とともに、「自由で開放的なインド太平洋構想」FOIPを推進している。インドと日本の協力関係はかつてない程に深まっている現在、プーチンの戦争を終わらせ平和を守る上で両国が何らかの知恵を打ち出せないのか、見守っている。

### ロシアのウクライナ侵攻について

加藤 純子

2月24日にロシアがウクライナに侵攻してから、テレビ、新聞は毎日このことを大きく報道しています。子どもを含む多くの市民が死傷し、他国に避難し、避難できずにウクライナに留まり寒い中食べるものや薬もなく不安な状態にある。ロシア兵も訓練だと聞いていたのに戦争に送り込まれ死傷している兵士もいる。ロシアによるウクライナ侵攻は国際法違反であり、武力による現状変更・主権侵害は認められないでしょう。どうしてこんなことになるのか。「一日も早く停戦を」と願うばかりです。

3月20日に、仙台・羅須地人協会事務局から「ウクライナの現状に関してのお考え、ご意見、ご見識等」を1,000字程度以内ならば一行でもいいので3月末迄に投稿するようとのメールが来ました。

プーチンは兄弟国家と呼び同じ民族と述べているウクライナになぜ侵攻したのか？歴史的な背景があるのだろうと調べていくと、今まで知らなかったことがたくさんありすぎて、3月末迄に書くことが出来ませんでした。

#### なぜ侵攻したのか？(ロシア側の主張)

##### 1.ロシア系住民を保護するため

ウクライナ政府軍による「ジェノサイド(民族大量虐殺)」が東部地域で起きており「ロシア系住民の保護」「自国民の保護」のためとロシア側は主張しているようです。

ウクライナ東部ドネツク州とルガンスク州の一部は親ロシア派の武装勢力が占拠している状態で、2014年にクリミアをロシアが一方的

に併合し 4 月に武装勢力が政府庁舎等を占拠し独立宣言をしました。ウクライナ政府と激しく衝突し多数の死者が出ました(国連人権高等弁務官事務所によればこれまで双方で 14,000 人以上死亡)。収束のために 2014 年 9 月と 2015 年 2 月にフランス、ドイツの仲介で「ミンスク合意」が締結されました。

2019 年にウクライナの大統領に選出されたゼレンスキーはミンスク合意に自分は署名していないと言いはじめ、緊張状態にありました。プーチンは「ミンスク合意の履行を求めたが応じなかったのはゼレンスキーの方だ」と言いたいのでしょう。

2.NATO の東方拡大を阻止しなければならない。

ソビエト崩壊後 NATO に東欧諸国の加盟が続きました。1999 年ポーランド、チェコ、ハンガリー。2004 年バルト三国が加盟し、ウクライナ、モルドバ、ジョージアも NATO に接近。ロシアに照準を定めたミサイルが NATO に加盟した旧ソ連の国々に配備されており、NATO のこれ以上の東方拡大はロシアの安全保障の観点から受け入れられない。

プーチン側としては、「1990 年、アメリカのベーカー国務長官がソビエトのゴルバチョフ書記長に東方へは 1 インチたりとも拡大しない」と伝えた。にもかかわらず拡大しているのは約束違反と批判しています。文書は残っておらず、本当にそのようなやりとりがあったかについては諸説あるとのこと(新潮文庫にベーカー長官の回顧録があるようです)。

ロシア側には「大ロシア主義」というのでしょうか、西側の自由主義、民主主義とは相反する価値観があり、同じ民族であるウクライナはロシアと同じと考えていたが、ソ連から独立し 30 年経過したウクライナ国民(居住地域や年代で意識の差があるが)は違っていた。

2014 年のクリミア併合の時はロシア系住民からは歓迎され(併合に反対の住民も居ますが)実効支配しており、今回のウクライナ侵攻も短期間でロシアに有利な決着に持ち込むつもりが、予想外の抵抗を受け長期化している。これはロシア側の誤算だったのでしょうか。

マスコミは「プーチン:極悪人、ゼレンスキー:正義のために闘う勇者」という報道がなされているように感じられます。武力による現状変更・主権侵害は認められないのは当然ですが、ロシア側の主張の中には「ゼレンスキーの約束違反であるとか、NATO に対する脅威、約束違反」があり、ロシア国民の中に「NATO が悪い」と考える人もいます。西側、ゼレンスキーは 100 % 正義でロシア、プーチンが悪との報道の空気に違和感を覚えます。

戦争によって真っ先に死ぬのは一般市民であり末端の兵士です。武力による現状変更・主権侵害は認められないし一日も早く停戦し犠牲者を出さないようにしなければなりません、そのためにはどうしたらいいのか。

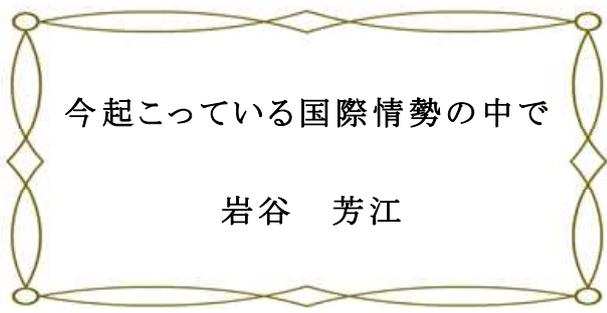
ロシアでは国営放送により「ロシアが行っているのは特殊軍事作戦であり、戦争や侵略ではない。ウクライナをアメリカの支配から解放するための作戦だ。民間人を 1 人も殺していない。」と報道し、戦争や侵略という言葉を使ったら法律に基づき訴追される。プーチンの支持率は 80 % を超えるとか。80 年前の日本と重なっているようにも思います(80 年前はまだ生まれていませんが)。

国営放送を信じている人、インターネット等で侵略戦争を起こしていると解っていても声を出せない人、両方居るのでしょうか。ロシア人とウクライナ人は家族、親戚関係にある人が多く、虐殺の事実を知ったら悲しみが大きいでしょう。「ロシア社会は自己充足的な面もあ

り、ロシア人はガマン強いので西側がロシアに行っている経済制裁も直ぐ影響が出るわけではない」との指摘もあるようですが本当に早く戦争を止めてほしいです。

今回の投稿にあたり、歴史的なことについて自分は本当に無知だったことを痛感しました。「ミンスク合意」「ブダペスト覚書」も知りませんでした。インターネットを見ていると本当にいろいろ出てくるのですが、自分の頭で未だ取捨選択ができない状態です。

北海道のすぐ近くに北方領土があり、中華思想という自由主義、民主主義とは異なる価値観を持つ中国がすぐ近くにある我が国日本。ウクライナ問題は「明日は我が身」。それなのに知らないことが多すぎる。歴史について深く学ぶことも大事だと思っています。



今起こっている国際情勢の中で

岩谷 芳江

昨年 2021 年 10 月 3 日から約 3 週間、ポーランドの首都ワルシャワで第 18 回ショパン国際ピアノコンクールが開催されました。

5 年に 1 度開催される本コンクールには世界中から 160 名以上のコンテストが挑み、会場はショパンの音楽を一音なりとも逃さず聴き入るマスク姿の観客で埋め尽くされました。その模様が様々な形で YouTube にアップされたこともあり、当方も 11 月頃から毎晩聴き続けられることに感謝するばかりです。

1810 年ワルシャワで生まれたショパンの時代も西ヨーロッパは 1830 年パリの七月蜂起などに翻弄され、ウイーンやパリに移り住む中で作曲されているショパンの音楽。郷愁や哀

愁を感じさせる曲が多いものの、古くから伝わる民謡の光と影を織り交ぜながら、時代や国を越えて人々の内面に訴える音楽が広く愛され続けている意味は計り知れません。

今年の 2 月 24 日にロシアがウクライナ侵攻を始めて 1 カ月以上が経ちます。ウクライナでは連日、学校や劇場、公営住宅、街中のビルが破壊され、子どもも含め多くの人命が失われ、目を覆いたくなるような惨状を映像で伝えられる度に胸が締め付けられる思いです。1 日も早い停戦が実現されなければなりません。世界は公正さが機能されず、信頼を失ってしまった今、どのようにして停戦に繋がられるのかが問われているのだと思います。

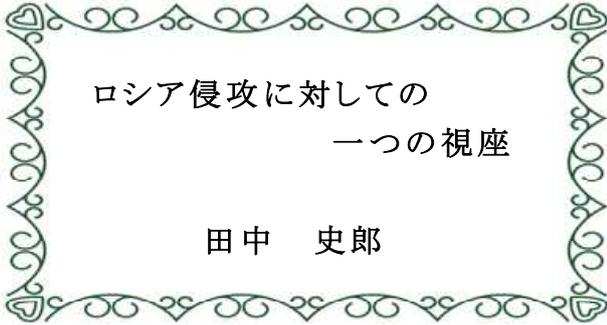
幼い頃から明治生まれの母親が機会ある度に「戦争は絶対に行ってはならない。勝っても負けても悲惨」と言うのを聞いて育ちました。決してロシアとウクライナだけに留まらず、世界中の人々の暮らしが様々な形で成り立たなくなり、困難な状況が生じ始めています。

殊にわが国などは食料自給率が 37 %、エネルギー自給率は 12 %と先進国では最低であるのに、未だに明確な打開策を打ち出せずにきています。食料政策では小麦、大豆を国産で賄えるよう目指すべきです。唯一賄えるのは米である以上、ご飯をできるだけ皆で食し、米粉の利用が増えるだけでも食料の安全保障の状況が改善されるでしょう。エネルギー政策では、資源がないわが国こそ再生可能エネルギーに大きく舵を取り、原発に頼らず省エネルギーを限りなく積み上げていく必要があります。再生可能エネルギーの積み上げは省エネな暮らし方とセットにしなければなりません。

さて、戦争の最中、ウクライナの国内避難民のシェルターになっている劇場では簡易ベッドが置かれたまま、歌手 2 名による郷土愛などをテーマにしたウクライナ民謡の演奏会

が開かれ、戦争という状況下で疲れ切った人々の心を癒した(朝日新聞)とのこと。日本では戦時中といえ、食べ物のお話になります、この地方の人々にとって音楽が心の大きな支えであることを知らされます。

ウクライナ難民は国外避難 400 万人を超え、隣国ポーランドには 220 万人が押し寄せている中、ポーランドの人々が温かく迎えてくれ、とても感謝しているとのこと。5 カ月前にはショパンの美しい音楽を世界に届けてくれたポーランド。今は一方的に難民にさせられたウクライナの人々に温かい手を差し伸べております。世界中の私たち一人ひとりも強く戦争反対を訴えつつ、平和のためにできることをシェアし合いたいと願うばかりです。



### ロシア侵攻に対しての 一つの視座

田中 史郎

このロシア侵攻を「ウクライナ戦争」と表現すべきか否かはさておき、連日のニュースに心を痛めている人も多かろう。小生もその一人だ。如何なる理由があろうと、人道的な見地から即刻の停戦を求めることに関して異論はない。

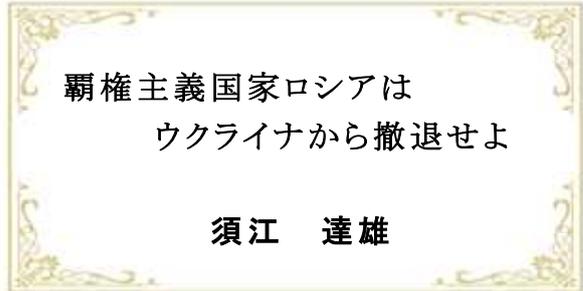
やや回りくどい言い方をしたのは、この間の情報がいわゆる西側からのものばかりであること、また歴史的経緯がほとんど語られていないことなど、不十分の点がないわけではないからだ。「ミンスク合意」、「ミンスク合意 2」の問題をはじめ、NATO の問題、アゾフ連隊の問題、さらに遡ればソ連の解体、ロシア革命の評価など、考慮すべき事柄は多い。

ここでは、しかし、たった一つのことを述べ

てみたい。それは、現ロシア政権とロシア人民(国民)を区別して考えること、また同様なことだが、現ウクライナ政権とウクライナ人民(国民)を区別して考えること、この点に他ならない(同様の視座は現日本政権と日本人民(国民)との関係でも成立する)。言い換えれば、事態を国家間対立として見るのは、一面的であり、事の本質を看過する懸念があるということだ。今回の戦争においても、ウクライナとロシアでは、互いに親戚関係や縁者をもつ人々も多いと聞く。ウクライナ人民とウクライナ国家(政権)は、またロシア人民とロシア国家(政権)は当然ながら利害が異なる。

戦争は国家対国家の戦争となるが、その内実は内政の失敗を糊塗するため、ないしは政権の求心力強化のためになされることしばしばある。あるいはひねくれた見方をすれば、それは軍事産業によるロビー活動の結果でもある(例えば、アメリカのイラク戦争をみよ)。

昨今では、日本において在住ロシア人バッシングが多いとの報道もあるが、それらは上の観点からみても間違っている。あくまでも我々の非難すべき対象はプーチンとその政権である。この瞬間も殺されている人々がいる。ロシアの兵士に訴えたい。プーチンのために「殺すな」。プーチンのために「死ぬな」。即刻の停戦を求めるものである。



### 覇権主義国家ロシアは ウクライナから撤退せよ

須江 達雄

(1)ロシアによるウクライナへの侵略は都市を破壊しつくし、多くの民間人の命を奪い取るという許し難い暴挙です。

メディアを通じた風景は戦前の日本の中国

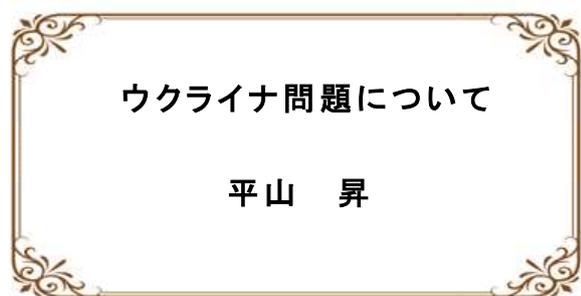
大陸への侵略、米国の日本に対する空襲及び原爆投下を想起させるものがあります。しかし日本の敗北は憲法前文及び九条を要とした日本国憲法を獲得しました。

この憲法を生かし、ロシア・中国・米国の覇権主義に反対し国連の場を通して世界の平和に貢献すべきではないかと思えます。

(2)ウクライナ侵略を通して明白になったこととして、核兵器・原爆の危険性に対してです。この地球上に存在させてはならない代物です。安倍前総理や一部の国会議員の「核兵器の共有」などは度し難い発言です。被爆国日本は「核兵器禁止条約」に率先して参加し指導すべき立場です。また福島の実験からも原爆廃止に舵を切るべきです。

(3)気候危機と第三次(核)世界大戦から地球を守るためには再生可能エネルギーを基に相互扶助と草の根民主主義にもとづく地域共同体を創出することが求められていると思えます。その体制を支える世界観としてかつてあらゆる地域の先住民族が共通に持っていた「万物に精霊・神が宿っている」というアニミズムの考え方が必要だと思っています。

宮澤賢治の作品にはアニミズムの世界が散りばめられています。(縄文・アイヌ)またウィリアム・モリスの図柄はケルト民族を想わせます。このことを課題として深化させたいと考えています。



私の周辺にはプーチンを批判する人とバイデン& EU を批判する人がいて、両者はなかなか折り合わない。前者は自由主義系でプー

チンによるウクライナ侵攻を批判し、後者はその原因はバイデン& EU による NATO の東方拡張とウクライナ東部におけるロシア系住民の虐殺にあるという。

ということで私の判断は二律背反、プーチンの目的はウクライナ東部のロシア化とみていたわけだが、侵攻 1 ヶ月後の状況を見れば、キエフ占領によるウクライナの政権転覆というプーチンの本音は挫折して、戦況はロシア軍による南部の要所マリウポリの総破壊の様相を呈してきた。そもそも武力による国境の変更は国連憲章違反なわけだが、私には夢があるということでプーチンが語ったのは、「ルースキー・ミール」という古来からのロシア的世界である。

片や新由主義の米欧帝国主義国家に対するに、プーチンは「ミール」というロシア的共同体を持ち出したわけだが、資本主義のオルタナティブに共同体をもってするのは理のあることで、同様に中国の習近平には西欧型民主主義のオルタナティブに中国型民主政治を対置して、ウクライナ戦争ではロシアを支持している。冷戦終結後 30 年、それに勝利したアメリカはその後イラクとアフガニスタンに足をとられてその覇権は終焉しつつある一方、中国は覇権を二分する大国となり、このままウクライナ問題の終焉が見通せなければ、新冷戦によるハルマゲドン(核戦争)前夜的世界の始まりがリアルになる。

しかし、いま何よりも必要なのは一刻も早くウクライナにおける戦争を止めることであり、核の無い世界をつくることである。そしてそのためには世界の対立の構造を、「欧米の帝国主義国家群 vs.ロシア・中国の独裁専制国家群」から、「国家主義 vs.世界共和国主義」に変えることにあると私は考える。プーチンの「ルースキー・ミール」も習近平の「偉大な中国」もパクス・アメリカーナも、改憲による明治

憲法への復古を目論む日本の政権のいずれも、背景にあるのは国家主義であり、国家は協力して新しい世界を創ることよりもそれぞれのネイション(国家幻想)を掲げて対立し合う。必要なのはネイションの否定であり、そのためのキーワードは「アソシエーション」であろうか。人々が小さなアソシエーションをつくって、それを世界につなげることが、ウクライナ問題の根本的な解決、過渡的には国連だが、最終的には世界共和国による恒久平和につながると思うところ、よろしくです。

## 反ロシアのネオナチと ドイツ社民政権

土田 修

ロシアとウクライナの停戦協議が3月29日にトルコのイスタンブールで始まったが、ウクライナの「中立化」とともに「非ナチ化」が焦点の一つになっている。だが、日本の報道に接しているだけでは「非ナチ化」が何を意味しているのか理解できないのではないだろうか？

フランスの月刊新聞ル・モンド・ディプロマティークは「ウクライナの極右ナショナリズム」(2014年3月号)という記事で、親ロシアといわれたヤヌコヴィッチ政権を倒した“マイダン革命”(2014年2月)の際に、親欧州派の民衆の先頭に立った極右政党「スヴォボダ(自由)」が元ネオナチ集団であることを暴露している。この“マイダン革命”で治安部隊と銃撃戦を繰り広げた「ライトセクター」はウクライナ西部ガリツィア地方を根拠地とする極右ナショナリスト集団だ。米ネオコンとの繋がりも指摘されている。

また、“マイダン革命”直後にウクライナ国軍に編入された「アゾフ大隊」は、かつてナチ

ス・ドイツに協力して旧ソ連軍と戦った「ウクライナ蜂起軍」のステパン・バンデラを英雄視する白人至上主義の「ネオナチ」集団だ。ドンバス紛争に参戦し、ロシア語話者の分離派住民を虐殺・拷問したことでも知られる。アゾフ大隊の本拠地であるマリウポリがロシア軍によって集中的に攻撃されたのは「ウクライナのネオナチを叩き潰す」というプーチンの明白な意志があったからだ。

アゾフ大隊は欧州を中心に世界中からSNSを使って戦闘員を集め、アメリカやNATOから供与された武器を使って軍事訓練を行っている。ワシントン・ポスト紙によると、その数は1万7000人を数え、近い将来、白人至上主義を唱える戦闘員たちが世界中に散らばり、かつてのISのように各地でテロを起こす危険性があると指摘している。

ロシアによるウクライナ侵攻はスターリン時代の「失地回復」をめざすポスト帝国主義的な暴挙であり、擁護する気は全くない。だが、ゼレンスキーを「善」、プーチンを「悪」とする二元論には釘を刺しておかなければならない。

ロシアの国境に迫るNATOの東方拡大、汚職まみれのウクライナ政府、米ネオコン(反ロシア暫定政権の樹立を画策したヴィクトリア・ヌーランド国務次官補)によるウクライナ工作、「ミンスク合意」を無視して戦い続けたネオナチ武装集団(アゾフ大隊や各地の自警団、オリガルヒの傭兵など)、ウクライナのメディアを支配するユダヤ系オリガルヒ(新興財閥)のコモロイスキーによって大統領になったゼレンスキー傀儡政権…こうした事実を知るだけで、ウクライナが真っ当な「民主国家」であるという幻想はたちどころに消えてしまう。

ところで、ドイツ社民のショルツ政権はロシアからのパイプライン計画(ノルドストリーム2)を凍結し、ウクライナに武器を供与するこ

とを決めた。メルケル前首相の外交・安保政策からの大転換だ。そこには連立政権で外相を務める「緑の党」のアンナレナ・ベアボックの意志が強く反映している。「親米」一辺倒で「反ロシア・反中国」に凝り固まったベアボックは、ロシアが求めている NATO・EU から距離を取る国家群による「安全地帯」の設立を認める気がない。ウクライナのネオネチにとって都合の良い存在だ。

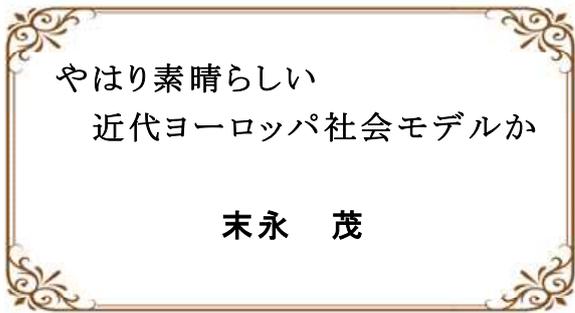
米軍主導の NATO をめぐってはドイツとフランスの関係も一筋縄ではない。2017年1月に大統領に就任したトランプが「NATOの存在意義を問い直す」と宣言した時、また2017年5月のG7首脳会談後にメルケルが「欧州は安全保障を自分たちで確保しなければならない」と発言した時、NATOは風前の灯になったが、米ネオコンと軍産複合体の猛反発でトランプは方針転換し、メルケルもそれに追随した。2019年にマクロンが「NATOは脳死状態だ」と口走った時にメルケルは電話でマクロンを叱りつけている。

ロシアのウクライナ侵攻前、バイデンはゼレンスキーを焚き付け、国際世論を煽ったが、そのバイデンは早々と「戦争になっても米軍は派遣しない」とはしごを外した。米国とNATOに見捨てられたゼレンスキーが、今回の和平協議で「ウクライナの中立」を良い出したのは当然のことだ。後はロシアの要求する「非ナチ化」を遂行するため、極右ナショナリストの武装集団を抑え込めるかどうかにかかっている。

いかにバイデンがプーチンを「人殺し」「戦争犯罪人」と呼んでも、「オバマもバイデンも引きこもり外交」とみなしているプーチンにとっては痛くも痒くもない。カカシが叫んでいるようなものだ。

ロシアによるウクライナ侵攻は、NATOをめぐる、旧大陸とアメリカの主導権争いを改めて

浮き彫りにした。そのはざままでウクライナで軍事訓練を受けている白人至上主義の戦闘員が今後どのような動きを見せるのか気になるところだ。何より、ドイツ社民政権による欧州安全保障政策の大転換が旧大陸にいかなる変化を生み出すのか注視する必要がある。



やはり素晴らしい  
近代ヨーロッパ社会モデルか

末永 茂

現実の社会が厳しいだけに、理想像は美しく描きたくなる。ヨーロッパの名著といわれるものの多くが、こうした類のものである。そして、現在、第三次世界大戦をも誘発しかねない国際情勢になってきた。数年前からその兆候をウォッチしていたので特段驚きもないが、我が国の学者(自然・社会・人文のいずれも)は平和ボケしている人がなんと多いのか、とは感じていたし、指摘もしてきた。

戦争が起こる国際関係要因にはそれぞれの歴史事情というものがあるが、それらを包括し、原因を一元的に解明したものは未だないのでないか。論者によって階級対立とか、民族問題、宗教対立等々によって説明されているが、根底には経済的利害関係の激化や人口増加率の高い地域が、押しなべて紛争発生も頻発しているように思う。

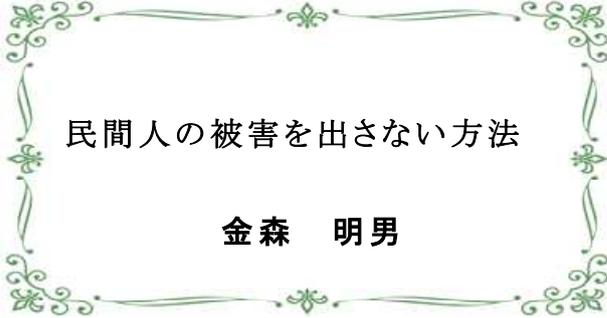
羅須ゼミで何度か報告する機会があったが、その都度断片的に第三次世界大戦に拡大するような紛争と国際情勢は何れやってくるだろうという話をしてきたが、早々にその端緒?が発生した。ウクライナ共和国はロシア・ソビエトの要衝であり、産業的にも中枢部門を担ってきた地域である。ウクライナ戦争が膠

着し長期化した場合、紛争は各地に飛散する可能性は避けられない。ロシアや中国のような帝國的組織原理を保持している国家は、「土地と人民」の支配を生産単位としているので、領土優先の論理を温存させる。

マルクス『資本論(経済学批判)』はエンゲルスの『反デューリング論』で展開している社会主義論や唯物史観と深く関わっている。つまり、『資本論』は資本制経済社会システムの運動法則を解明することによって、カオスの経済運動を意識的に「科学的」にコントロールすることが出来ると想定している。つまり、経済学を批判し合目的な「社会工学」へ移行することを至上の社会とするのである。しかし、社会的機能と自然科学的意味における数量概念の位相が論理的に単純結合はできない。誤差や誤謬が常に伴うのが社会現象であるから、これらをどんなに行政的に強制運用しても無理が出てしまう。そして、「自由の王国」を目指すはずの理念が、結果的に『収容所群島』になってしまうのであるから救いようがない。社会はある程度のフレキシビリティがなければ窒息してしまう。ウクライナ国民はこれを求めているのである。そのために市街戦をも厭わないのであるが、プーチンの世界観ではそれが許せないことになる。

一方、強権的な支配や政治スタイルに対して、国際法や国際連合が紛争解決のために十分機能しないことは、戦後一貫して指摘されてきた。従わせるための実態としての強制力、軍事力を担保できないためである。他方、国際法は分裂に次ぐ分裂を経過して成立した国民国家や、小国家間の対外調整機能に過ぎない。帝国の統治原理は政権交代が困難な政治的支配であるが、市場機構を重視する国家は経済活動優先の分権的政治体制である。そのため我々は自由で、いわゆる民主的体制を志向する。しかし、世界政府

なき現実の世界はこの狭間で動いている。



## 民間人の被害を出さない方法

金森 明男

思い出しましたが、「付随的ダメージ」と云う表現が有ります。軍事行動の結果、民間人が巻き添えになる事です。冷戦時代のいわゆる防衛知識人の間で、軍事的な衝突を想定した議論の中で出て来た表現なのだそうです。それで、被害を無くす方法があるのか？

その後、驚くべき事に、テロとの戦いの中で、答えを出したのです。

「オバマ氏は民間人の犠牲者の数え方を変えた。これで彼の自由裁量の幅が広がった。オバマ政権幹部によると、これからは攻撃地帯にいる人たちで、戦闘年齢の男は、すべて戦闘員として数えられる。ただし諜報機関が死後に無罪と認めた場合は別だ」(「ニューヨーク・タイムス」29 MAY 2012。N.チョムスキー『誰が世界を支配しているのか?』(157頁、双葉社、収録)

したがって、推定無罪の“聖なる原則”を維持したまま、殺したあとで無罪かどうかを決めるわけだ。

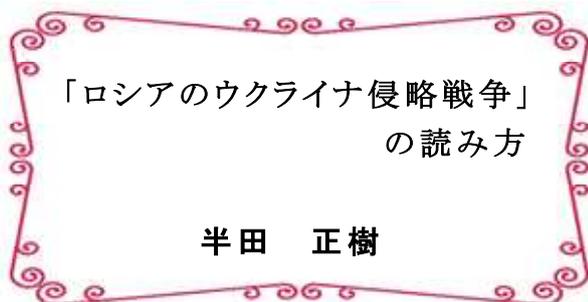
「戦闘年齢の男」と勝手に、根拠なく決め付けています。情報機関が調査出来る環境か？「無罪と認めた場合は別だ」とは、どう別なのか？ 疑問ですが、それと共に、この様に一方的に決定すれば、確かに民間人の被害は無くなる？ 誤爆が無くなる？ でしょうが、一旦、この様に考える事が出来れば、

考えた瞬間から、拡大解釈が始まっているでしょう。この様な数え方が、ごまかしなのも紛れも無い事実です。なぜなら、被害者が、いなくなるわけでは無いからで、さらにいえば、被害を強国の論理で、隠蔽しただけです。自国に都合のいい論理を、理不尽な論理を、一方的に押し付けられたら、まとまる話などあるわけが無い。紛争を拡大再生産するだけなのです。戦争する者が自身の存在理由を作り出しているのです。今回も又、この延長線上の出来事です。

情報戦の様相が意識されます。これの良い点は唯一つ、虚実入り乱れ判断が困難になりますが、一方では相対化されます。その結果、大義名分が、元々無いのですが、成り立たなくなりますが、東も西も、双方の行動が見えてくるのです。しかし、二項対立の枠組みでは、今迄の繰り返しです。解決出来ません。

さらには、力の行使は、対外的ばかりではなく、僭主・独裁的な体制(貧困・不平等を放置している国は全て入ります)は、国内的にも力を行います。だから、戦争にならなくても、その様な事態が常態化しています。

結局、民間人が被害を受けます。受けています。



「映画の父」と呼ばれる D・W・グリフィスの代表作の1つに『イントレランス』がある。

人類の歴史は常に Intolerance (不寛容) がまといついた歴史にはほかならないが、それ

はいわば不条理と対になっているという機微を主題とする作品であった。第一次世界大戦勃発後の反戦・厭戦の気分が横溢するなかで制作され、20世紀のまだ劈頭というべき時期の1916年に公開された。わたしは、時代も背景も違う4つの物語がシンクロしつつ進行するモノクロ・サイレントのこの作品を20世紀の末期にVHSのビデオではじめて鑑賞した。人間世界につきまとう不条理をえぐるその秀抜な表現に肺腑を衝かれたことを思い出す。

20世紀は、「戦争と革命」の世紀と呼ばれてきた。第一次世界大戦(1914年～1918年)、第二次世界大戦(1939年～1945年)、ベトナム戦争(1955年～1975年)があり、ロシア革命(1917年)や中華人民共和国の成立(1949年)があり、キューバ革命(1959年)があった。いうまでもなく20世紀の後半は冷戦期(1947年～1989年)としてあった。

これらのことは、まさに20世紀が、それまで以上に Intolerance (不寛容) から免れない時代であったことをまぎれもなく示した。たとえば第一次世界大戦は帝国主義諸国間の相互の Intolerance (不寛容) が背後にあり、ロシア革命は苛酷な旧社会体制に Intolerance (不寛容) とならざるをえなかった人民大衆の存在があったというように、である。

そして、2022年2月24日、プーチンのロシア軍がウクライナに「特別軍事作戦」を展開した。21世紀もまた Intolerance (不寛容) の世紀として刻印された瞬間であった。いな、正確には2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件(September 11 attacks)や2003年のイラク戦争(米英軍によるイラクへの武力攻撃)ではじまった21世紀の現実をさらに鮮やかにかつ強固に示したというべきかもしれない。

しかるに、わたしたちは、まず何よりもプーチン・ロシア軍のウクライナ人民に対する決し

て許せない暴虐・非道を徹底糾弾するとともに、プーチンが Intolerance（不寛容）となったことの因って来るところのものは何かをつかむことが求められているように思う。理由を問わずプーチン・ロシア軍の残虐・無道を弾劾するのではなく、理由を闡明しそれを問うこともまた不可欠と知るべきといえよいだらうか。

では、その「理由」をいかにつかむのか。歴史的射程をどれほど伸ばしたうえで見究めるのか。国連安保理での決議をうけ国際法の要件を満たしている「ミンスク合意」(2015年)をゼレンスキーが真摯に実行しようとは遂にしなかったことなのか。ただそれはいわば“最後の一滴”に過ぎず、それまでに累積した諸々の因子をつきとめることが不可欠なのか。ここでは詳しく立ち入ることはできないが、問題の核心は明らかにこの点にあるといつてよいだろ

う。無論、ゼレンスキーのうしろにバイデンの影がちらついているのも見逃してはなるまい。

ところで、「ソ連の崩壊を悲しまない人には心がない。けれど、ソ連の復活を願う人には頭がない」と口にした人物をご存じだろうか？この科白のなかに今回の「ロシアのウクライナ侵略戦争」を読み解くカギが秘められているようにも思う。その人物こそウラジーミル・プーチンその人だからである。問題は、たんに Intolerance（不寛容）に収斂しえないことも教えてくれるようにも思われる。とまれ、「ソ連の復活を願う人には頭がない」のはその通りだとして、それが実は市場原理を軸とする社会構成体志向を土台とするかぎり、しかも専制主義・強権支配と一体化のものであるかぎり、そこには「心も頭もない」と断罪するほかあるまい。

## 編集後記

ご覧のように、今号は「ウクライナ問題特集」となった。会員に投稿を呼びかけたところ、予想を超える論考が寄せられた。この問題に対する関心の高さ、否、この問題の深刻さの反映であろう。投稿には通常募集しているエッセイなども含まれていたが、今回の掲載には紙面の制約から遠慮いただいた。申し訳ない限りである。

本協会はこの2年以上にわたって、新型コロナウイルス感染症の蔓延により活動の制限を余儀なくされた。苦肉の策としてリアルとオンラインのハイブリッドで進めてきたが、必ずしも十分とはいえない。本「センターだつしん」、「羅須ゼミ」等も含め、今後の方向性についてもご提案を賜りたい。

センターだつしん 第5号 2022年4月

## 仙台・羅須地人協会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町2-5-12

一番町中央ビル 8階 「シニアネット仙台」内

HP <http://rasuchijin.jp/>

Tel 022-266-5650 FAX 022-266-5662

Mail [rasuchijin-office@rasuchijin.jp](mailto:rasuchijin-office@rasuchijin.jp)

